

社会教育施設の自己紹介

【施設名】

愛知芸術文化センター

【施設概要】

愛知芸術文化センターは、平成4年10月30日栄地区にオープンした①愛知県美術館、②愛知県芸術劇場、③愛知県文化情報センターがお互いに連携し、ひとつになって、芸術文化の情報を発信していくという、国内では初めての複合的な大型文化施設です。名城地区には平成3年4月にオープンした愛知県図書館があります。



【愛知芸術文化センター外観】

※愛知芸術文化センターHP：<http://www.aac.pref.aichi.jp/>

①愛知県美術館は愛知芸術文化センター10階に位置し、1フロアにある8つの展示室とロビーなどをコレクション展示と企画展にふりわけています。

約7,000点のコレクションの根幹をなすのは国内外の20世紀美術です。ピカソやマティス、クリムト、クレーなどから21世紀の今日まで、美術の動向をたどるとともに現在を示すことのできるコレクション形成に努めています。

また、2001年から03年にかけて名古屋の美術収集家木村定三氏とそご遺族から寄贈された3,000点を超える「木村定三コレクション」もあります。考古遺物から現代にわたるこのコレクションの中には、浦上玉堂や与謝蕪村などの文人画をはじめとする江戸時代の絵画、木村氏と交流のあった洋画家熊谷守一の作品、陶磁器といった大きなまとまりがあり、それだけで展覧会ができるほどです。

年間5回ほどの企画展は、歴史に残る優れた芸術家の回顧展や現代的なテーマによるグループ展、国際規模のものから地域に密着したものまで様々な展開しており、愛知県域で活動する若手作家を紹介する個展なども随時おこなっています。



【愛知芸術文化センターフォーラム】

②愛知県芸術劇場は、国内初の本格的なオペラ上演ができる大ホール、国内最高水準のパイプオルガンを有し、クラシック音楽に最適な豊かな響きを持つコンサートホール、演劇、舞踊、音楽などが自由なスタイルで展開できる小ホール、そして大中2つの本格的なリハーサル室を有します。

③愛知県文化情報センターは、「タリカコレクション」をはじめとする美術、音楽、演劇などの専門図書、楽譜、展覧会カタログ、クラシック音楽を中心としたCD・レコードなどが揃うアトライブラリー、国内外の展覧会やコンサート、演劇などの多様な芸術情報を収集し、マルチメディアやポスター、チラシなどで皆様に提供するアートプラザ、高い芸術性を有しながらも一般的な認知が十分とはいえない実験映像、現代舞踊、現代音楽・民族音楽を自主事業として取り上げる

企画事業部門の3つから成り、今日の多岐・多様化する芸術の最新動向を提示する役割を果たしています。

このほか、講演会、展覧会、会議などに利用できるアートスペース、公募展やグループ展に利用できるギャラリーを備えます。

【特色ある取り組み】

愛知県美術館では、幅広い層の方々に美術に親しんでもらうため、大人から子供、教師、視覚障害者などさまざまな対象への鑑賞会などを行うとともに、美術館の使命や活動を理解し協力してもらうための取り組みにも力を入れています。近年の事例を3つご紹介します。

①友の会有志による作品保存用品制作

愛知県美術館友の会はその目的に、美術館活動への支援を含んでいます。会員有志により広報や教育などで多くのサポートを頂いていますが、一つのグループでは作品をより安全に展示・保存するためのクッションや、錘用の布袋、彫刻1点ごとの専用カバーなどを制作しています。保存担当学芸員から作品の素材と環境や経年による劣化などについての小講義もあり、参加者は作品への愛着が増し、展示を見る目も変わっているようです。



【作品保存用品制作の様子】

②学校の先生方との鑑賞教育研究

開館まもなくから企画展ごとに、小・中・高校の先生を対象とした説明会を開催していましたが、その後「鑑賞学習交流会」に発展し、美術館と学校が連携しての鑑賞教育について意見や情報を交し合う場となりました。平成18年度にはさらにそこから「鑑賞学習ワーキンググループ」(現在約35名)が生まれ、月1回の集まりをもっています。児童・生徒の美術館体験から、美術館で見た作品をヒントにしての制作や子供たちによる展覧会などの実践報告、先生方によるギャラリートークやワークシート作りなどが始まっています。

③裏方の仕事を伝える公開シンポジウムの開催

ふだん来館者の目にふれない美術館の仕事にも理解を得るべく、収蔵庫や修復室、撮影室などをお見せする「バックヤード・ツアー」を開催したほか、平成18年11月に「作品をまもり、伝える美術館—ある仏画(木村定三コレクション)の修復をめぐる」と題した公開シンポジウムを開催しました。これは修復が必要な鎌倉時代末頃の仏画を例にとり、表具を解体した現状を報告し、美術史・絵画技法・修復技術の各専門家が作品についての見解を述べた上で、修復方針について討論するものでした。美術品の修復結果を報告書として公開することはありましたが、中途段階を一般の方々に示すことで、作品を保存するという美術館の役割とその真摯な姿勢を広く認識していただくとする初めての試みでした。

愛知県文化情報センターの自主事業は、専門の学芸員を擁し、映像、舞踊、音楽を中心に、現代芸術の最先端を独自の視点でとらえ切り開いてゆく、ユニークでオリジナリティに富んだものです。

映像事業では、「身体」をテーマとする実験的な映像作品「オリジナル映像作品」を開館以来、年に一本のペースで制作してきました。これまでの作品はいずれも高い評価を得、国内はもちろん、国際映画祭や企画上映会など海外での上映機会も少なくありません。平成18年度は第15弾となる辻直之監督『影の子供』を初公開し、現在、第16弾を制作中です。また、映像表現の新たな局面を展開してきた、先鋭的な作品を紹介する「アートフィルム・フェスティバル」などの上映会を行ってきました。

舞踊事業は、コンテンポラリー・ダンスを継続的に扱っています。なかでも、ダンスを核に、音楽、美術、演劇を融合させた総合的な舞台作品「ダンスオペラ」は、昨年までに4作を制作しましたが、4作目からは音楽もオリジナルとなりました。今年度は5作目として、シェイクスピアの『ハムレット』をオフィーリアの視点から描き出す『ハムレット～幻鏡のオフィーリア』を制作・上演しました。また、国際レベルにある愛知のバレエの世界を幅広く紹介するオリジナルの企画を開催しています。

音楽事業は、一般的には触れる機会が少ないとされる民族音楽や現代音楽について、コンサートや講演会などを通じて紹介に努めています。「現代音楽家シリーズ」はジャンルにとらわれないボーダレスな活動を続けている音楽家による、自らの音楽活動について語るレクチャーシリーズです。1つのテーマに沿って、多様な現在の音楽を紹介する企画「特集音楽公演」では、今年度は没後10年を迎えた武満徹を特集する『武満徹を聴く、武満徹をうたうコンサート』を開催しました。

また、複合文化施設であることを踏まえ、異なるジャンルを横断したパフォーマンスやコンサート、レクチャー、上映会などを気軽に触れることができるようにした「イベントーク」があります。

さらに、普及活動にも力を入れ、ややもすると難しいと思われがちな現代芸術をわかりやすく解きほぐす、初心者向けの講座「文化情報センター・ゼミナール」をはじめ、実際に参加して体験してみるというワークショップも積極的に行っています。

そしてこれら文化情報センターの事業は、登録制で公募した「サポートスタッフ」の方々に支えられて制作・運営しており、その活動はイベントの準備、運営、広報など多岐にわたっています。



【ダンスオペラ『UZME』】

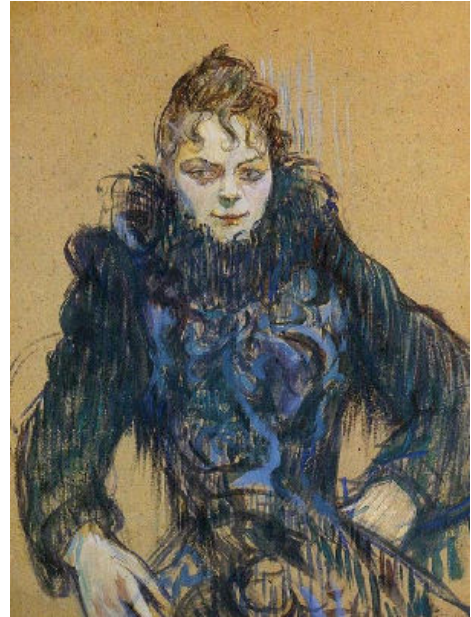
【今後の企画展の紹介】

○ ロートレック展ーパリ、美しき時代を生きてー

平成19年11月13日（火）～平成20年1月14日（月・祝）

アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック（1864－1901）が活躍した19世紀末は、パリの大衆文化が花開いた時代です。ロートレックはダンス・ホールやサーカスなどの盛り場で喝采を浴びる芸人たちの身振りや、娼館の女性たちの姿を作品に描きとめました。

本展では、油彩約20点をはじめとして、水彩・素描、ポスター、版画という多岐にわたるロートレックの制作を紹介します。同時にロートレックの活動の背景となった大衆文化を紹介する雑誌、写真、映像などの関連資料も併せて展示します。



《黒いボアの女》1892年 オルセー美術館

©Photo RMN/Herve Lewandowski

○ 木村定三コレクション名作展

平成20年1月25日（金）～3月23日（日）



卓越した審美眼をもった美術蒐集家、故木村定三氏のコレクションには、重要文化財に指定された与謝蕪村や浦上玉堂の名作をはじめとする江戸絵画、熊谷守一や小川芋銭など近代の画家たちの質量ともに群を抜く作品、茶陶をはじめとする陶磁器から仏教美術まで、幅広い分野の優れた美術品が数多く含まれています。

この展覧会では、寄贈いただいた3,000点を超えるコレクションの中から、選りすぐりの名品をご紹介します。

小川芋銭 《若葉に蒸さるる木精》 1921年 絹本着色
木村定三コレクション